

旧帝国図書館時代の児童書

——歴史と課題——

田 中 久 徳

はじめに

1 統計・文書からのアプローチ

旧帝国図書館時代の資料収集
戦前期児童書の「シマ」
児童書出版数の検討
文書記録にみる手がかり

2 蔵書面からのアプローチ

明治初期の翻訳物
「博文館」叢書
金港堂書籍
小川未明著作にみる受入の揺らぎ
昭和戦前期
児童雑誌

むすびに代えて—今後の課題

はじめに

旧帝国図書館時代¹⁾の児童書²⁾は、重要な資料群の欠落など多くの問題を今に残している。しかしながら、これまでは石川春江氏の一連の論考³⁾の他には、瀬田貞二氏⁴⁾、乙骨淑子氏⁵⁾による資料紹介の事例が目をひく程度で、旧帝国図書館時代の児童書コレクション全体について、その特色や問題点が論及されることは少なかったように思われる。

いうまでもなく、旧帝国図書館は近代日本唯一の国立図書館として明治期以降国内で刊行された出版物の包括的収集・保存を標榜した機関である。厳密な意味での法定納本とは異なるが、出版法制により出版者が旧内務省に届出た出版物の交付を受ける特権が与えられていた訳で、震災・戦災をくぐりぬけて今日に伝わる蔵書には児童書を含む明治以降の出版物の大半が収蔵されていると信じられてきたことは、当然のことでもあった。

旧帝国図書館の蔵書を引き継いだ国立国会図書館では、戦後一時期、児童書資料の利用が事実上閉ざされていたため、児童文学研究者は独自に資料を集めることを余儀なくされた。後に大阪国際児童文学館の核となる「鳥越コレクション」で知られる鳥越信氏もその一人で、ご自分の蔵書を研究者に公開されていたが、国立国会図書館に児童書が現存しないことへの疑問を述べたことがある⁶⁾。

「私の所にたずねてくる人たちが口をそろえていうのは、国会図書館をはじめ、図書館になかったから、というせりふである。ふつうの図書館はともかくとして、なぜ国会図書館にないのか私にはどうしても理解できないが、これは事実である。(略) 児童文学の資料収集が困難なのは、それが子どもによって読まれるものであるために、消耗度がきわめて高かったという点にある。(略) だからこそ、本来ならば、国会図書館こそがその保存を全うしていなければならなかったはずなのである。とくに、国会図書館は、少なくとも戦前は「献本」によって本がそろっていたはずで、すべての本があるはずなのに、どうしたわけかそれが無い」

後述するように、旧帝国図書館での新刊書の収集は必ずしも網羅的なものではなかったが、鳥越氏がこの文章を発表された当時は、実は、戦前期の児童書の多くが未整理の状態におかれていた。昭和43年に児童文学研究者、滑川道夫氏の新聞投書を契機として⁷⁾、国立国会図書館の児童書の公開を求める運動が広がり、その結果、戦前の未整理資料を含む目録(『国立国会図書館所蔵児童図書目録上・下』以下、『児童図書目録』と略)が刊行されて、ようやく利用の方途が開かれたのである⁸⁾。

この『児童図書目録』に収録された戦前期刊行児童書は、当時並行して進められた『国立国会図書館所蔵明治期刊行図書目録』と重複するものを含め4,000冊弱であったが⁹⁾、果たしてこれが実際に刊行された児童書全体に対してどの程度の割合を占めるものなのかは、根拠になる出版統計等の不備もあって、これまで正面から取り上げられたことはなかった。

本稿では、立ち遅れている近代日本の児童書資源の利用環境を整備するための基礎的検討という観点から、戦前期までの旧帝国図書館時代の児童書資料について考察していきたい。根本に横たわる問題意識は、①明治以降戦前期までに出版された児童書(図書、雑誌)の総量はどのくらいあったのか、②そのうち旧帝国図書館で収蔵したもの(そして国立国会図書館へ引き継がれたもの)の割合はどのくらいか、③旧帝国図書館で所蔵しなかったものが多数あるとすれば、それはどのようなものか(時代的変遷や出版形態によって所蔵状況に差がみられるのか)といった疑問である。

もとより、拠るべき資料が乏しく、課題の大半が問題提起のままとどまらざるを得ないが、現時点でわかる範囲についての整理を本稿の主眼としたい。具体的には、国立国会図書館に残る戦前期の児童書コレクションと大阪国際児童文学館など、この時期の児童書を比較的多数収蔵する類縁機関の所蔵状況との比較や児童出版史の研究成果との対照により、旧帝国図書館の児童書についての歴史的・制度的経緯を概観し、あわせて、当時の資料観・収集方針や児童書出版史の一端を推測する。また、これまで公表された旧帝国図書館時代の文書記録等も参照し、明治末年の乙部図書焼失事件や大日本教育会への図書貸付など、児童書と関連深い出来事についても触れ、識者の関心を喚起したい。

拙論では、断片的推論に終始すると思われるが、最後に今後の調査研究の進展のための課題を提出して、論考の不備を補うことにしたい。

注

- 1) 旧帝国図書館は、その名称をたびたび変更したが、本稿では、明治5年の書籍館から昭和23年の国立国会図書館発足までを「旧帝国図書館時代」と総称する。
- 2) 本稿では、図書、雑誌を含む児童対象出版物を総称する語として「児童書」を用いる。
- 3) 石川春江『国立国会図書館の児童書』創林社 1980
- 4) 瀬田貞二氏講演会記録『子どもの本について—その資料的価値—』国立国会図書館児童書の会 1968
- 5) 乙骨淑子「貴重な資料の発掘—国会図書館の死蔵児童書について—」『日本児童文学』vol.15, no.10, p.56-59, 1969
- 6) 鳥越信「児童文学と文献資料」(初出『日本児童文学』vol.13, no.5, p.24-29, 1967)『日本児童文学史研究』風涛社 1971
- 7) 滑川道夫「児童文学についての二つの提案」『毎日新聞』1968年5月17日夕刊
- 8) 児童書公開運動の経緯は、磯村英一、松浦総三編『国立図書館の課題』白石書店 1979に詳しい。前出の瀬田氏の講演会や乙骨氏の資料紹介は、一連の運動の中で行われたものである。
- 9) 厳密には、タイトルで計数しているものを含むため、約4,000件とする方が正確である。『国立国会図書館所蔵児童図書目録』の編さん刊行にあたって『国立国会図書館月報』no.120, p.22-23, 1971

1 統計・文書からのアプローチ

まず、旧帝国図書館での児童書の状況についての全般的状況を概括するため、『帝国図書館年報』等の統計資料や文書記録等を手がかりに検討する。

1-1 旧帝国図書館時代の資料収集

旧帝国図書館時代の児童書コレクションの概略を知るためには、当時の資料収集についての説明が必要である。旧帝国図書館での新刊書の収集は、明治8年の東京書籍館時代以来、出版法制により旧内務省へ納入された検閲資料¹⁾の交付(内交)という形式によっていた²⁾。

この内交本には、検閲の対象となる雑多な出版物が含まれたこともあり、旧帝国図書館では、①甲部：利用・保存の価値ありとするもの、②乙部：目下の利用価値は乏しいが一応の保存の道を講じ価値については後日の判断を待つもの、③丙部：利用・保存の価値なく、一ヶ年保存の上廃棄するものに分別していた³⁾。

明治期においては、「児童書」の大半が「乙部資料」とされ、閲覧に供されなかった⁴⁾。甲乙の選別基準は時代の変遷とともに変化しており、岡田温氏は「文芸書は乙部扱いであったが、時代を下るにつれ甲部とされることが多くなった」⁵⁾と述べてい

る。次章で資料面からも跡付けるが、このような推移は、おおよそ児童書についても該当すると思われる。

受入資料の中で、甲乙丙それぞれの割合がどの程度であったのかは興味が持たれる点である⁶⁾。この点を明確にするため『帝国図書館年報』に記載された毎年の蔵書統計に基づき、各年の甲乙両者の増加数の変遷を追跡した⁷⁾。(表1…論考末にあり)

明治初年は記載の不備のため比較ができないが、明治20年代以降の受入数は、乙部が甲部を上回り、明治年間の和漢書では、甲部と乙部の蔵書数がほぼ拮抗している。ところが、大正年間から、甲部の受入が急増し、甲乙の比率が1:2以上に拡大していくことが読みとれる。この結果、昭和23年の国立国会図書館発足時点では、甲部564,718冊(63%)に対し乙部334,290冊(37%)(和漢書のみ)という構成であった⁸⁾。このような甲乙の受入れ割合の推移は、先ほどの「大正期以降、甲部児童書が増えた」という推測と合致している。

この他、受入れ区分に関連しては、廃棄されていたとされる「丙部」の中に児童書が含まれていたかどうか重要な問題と考えられるが、この点は後ほど旧文書の面から検討したい。

1-2 戦前期児童書の「シマ」

国立国会図書館が引き継いだ戦前期の児童書は、甲部として一般図書に含めて整理し閲覧に供されていたものと乙部図書とされたものに大別され、また、その後の国立国会図書館発足後もしばしば整理方法が変更になったために、一時は「7種類の分類区分によって書庫内の6ヶ所に分散した」とされるほど、複雑な蔵書の「シマ」が生じていた⁹⁾。

現在、国立国会図書館が所蔵する児童図書の概要を図1に示す。先の『児童図書目録』には、①『国立国会図書館所蔵明治期刊行図書目録』に収録の明治期乙部約600種、②帝国図書館旧蔵の900函および乙部図書中の別置図書約3,300冊(以上が戦前分で約3,900種)¹⁰⁾、③国立国会図書館開設後に所蔵するもの(絵本、漫画を含む)約32,000種が収録されているが、この他に戦前期の児童書としては、「旧甲部図書中の児童図書、および乙部図書中大正期から昭和初期までの児童図書」(図1の明治～昭和までの甲部15～799函、大正～昭和の乙部特100～118、特200～275に含まれるもの)がある。この部分は、一説に1,000冊以上ともいわれているが¹¹⁾、はっきりとした根拠はなく、全貌がなかなかつかめていない。現在進められている和図書廻り及入力作業の完了により、調査の前提となる基盤整備が進むことが期待される¹²⁾。

1-3 児童書出版数の検討

戦前期の「出版統計」資料に「児童読物」という区分が見受けられるのは、昭和15年の『出版年鑑』からで¹³⁾、「児童書」の定義が簡単ではないことも含めて、出版統計の面から児童書出版数を知ることは極めて難しい問題である。

現時点では、個別の児童書出版史を積み上げることで出版数の概要を推測する以外

		甲 部			乙 部			
		旧函架記号	備考	目録	函架記号	児童書	目録	
明治	1	15~99函	明治年間受入	『帝国図書館和漢図書書名目録』 第1編	特8~特72 (約58,000件)	明治期乙部図書のうち児童図書 (568タイトル、約1,200冊) (特8~特72中に混架)	『国立国会図書館所蔵児童図書目録 上・下』	
	26.12			第2編				
	32.12			第3編				
大正	44.12	316~399函	明治末~大正受入	第4編	特100~特118 (約20,000件)	大正期以降乙部図書のうち児童図書 2,116冊 (西暦年下2ケタ+著者記号) (ex. 見乙部25-O-5)		
昭和戦前	15.12	500~599函	大正末~昭和初期受入	第5編	特200~275 (約80,000件)			
		600~699函	昭和4年~11年頃受入	第6編				
	10.12	700~799函	昭和11年~15,16年頃受入	第7編+分類目録				
	15.12	(900~1019函)ウ函 昭和15年~20年頃受入児童書を除いて、戦後、NDC6版(ウ函)として再整理						
			旧甲部児童図書 935,952,970,971,995函 1,233冊 (ex. 児952-33)					
昭和戦後	21	割当庁本 昭和21~23年3月刊行の図書 1,616冊 (西暦年下2ケタ+著者記号 ex. 48-K-1)						
	23.4	NDC5版分類(a函) 昭和23年4月~25年8月整理 2,741冊 (NDC2ケタ+著者記号)						
	25.8	NDC6版分類 昭和25年9月~39年3月整理 14,777冊 (NDC3ケタ+著者記号)						
	39.3	NDLC分類 昭和39年4月以降整理分(Y1~Y19)						
	43.12	(漫画Y16、絵本Y17、Y18は戦前期刊行からの未整理分を含む)		同1975増加目録				
	50.12			同1981増加目録				
	56.12			同1986増加目録				
	61.12			同1991増加目録				
平成	3.12			同1996増加目録				
	8.12							

図1 国立国会図書館所蔵児童書の概要

に有力な手がかりはないものと思われる。この分野での代表的研究には、鳥越年表として知られる『日本児童文学史年表』¹⁴⁾がある。さらに、「鳥越コレクション」を基礎として発足した大阪国際児童文学館の蔵書目録（『財団法人大阪国際児童文学館蔵書・情報目録 1868～1945 増補改訂版』¹⁵⁾以下、『情報目録』と略）では、鳥越年表の収録資料を含めて、同館が未所蔵の資料であっても存在が確認された出版物の情報を記載しているため、今回の調査で戦前期の児童書出版数を探るための有力な手段として用いることにする。

表2は『情報目録』収録児童書点数、国立国会図書館（「国会」と略）、大阪国際児童文学館（「大阪」と略）それぞれの所蔵資料点数を刊行年別に比較したものである¹⁶⁾。

各々の機関での「児童書」という括りの違いもあり単純な比較はできないが、（例えば、大阪では「立川文庫」を児童書として収録しているが、国会では児童書に含めていない）これまで同種の数字はなかったため、一つの手がかりにはなるものと思われる。気がつく点として、国会の所蔵では、明治年間と昭和期の所蔵状況は比較的良好だが、大正初年の所蔵数が少ない。この点は、次章で個別資料の側面から検討を加えることにする。国立国会図書館には、この表のほかに甲部扱いの児童書や「立川文庫」のような大正期・昭和前期の乙部図書が残されており、全体ではおそらく5,000点を超えているものと推定される。

最後に児童雑誌の出版数について簡単に触れておきたい。戦前期の内務省の出版統計では雑誌が部数（納本数）で計数されているなどの問題があり¹⁷⁾、実数を知るのは難しいが、昭和14年に日本雑誌新聞社が刊行した『雑誌年鑑』が当時の商業雑誌のリストとして有力なものとしてされている。以前の調査では、昭和13年末の主要雑誌中、幼年分野（30種）、少年・少女分野（27種）のいずれも所蔵がなかった¹⁷⁾。児童図書に比べて児童雑誌の所蔵は極めて低い状況にある。

1-4 文書記録にみる手がかり

最後に方向を変えて、これまで知られている旧帝国図書館時代の文書記録等から、児童書についての検討を試みる。

前節の検討の結果からも『情報目録』収録児童図書の半数近くが、現在の国立国会図書館では未収録資料であることが示された。一方で、旧内務省には検閲のため大半の出版物が納入されていたとすると、この差を説明する理由として、①内務省から帝国図書館に交付されなかった、②交付後に帝国図書館で処分した、のどちらかが考えられる。

前者の例としては「雑誌」が交付されなかった問題を先に紹介した¹⁷⁾。後者の問題としては、「広告、引札、正月用の玩具、殆ど文字の記載のない日記類、帳簿類」などが該当するとされた丙部資料の問題がある。この点については、実際に「絵本」類などを廃棄していたことを推測させる文書が残されている¹⁸⁾。

明治24年9月16日付「文部大臣からの回答文書」には、「東京図書館所蔵図書ノ内、

表2 刊行年別にみた「国会」「大阪」の所蔵数の比較

	『情報目録』 件数	「国会」 所蔵数	「大阪」 所蔵数		『情報目録』 件数	「国会」 所蔵数	「大阪」 所蔵数
1869 明2	2		2	1908 明41	62	48	41
1870 明3	11	0	11	1909 明42	45	74	27
1871 明4	0	0	0	1910 明43	46	70	24
1872 明5	0	4	0	1911 明44	81	116	45
1873 明6	2	6	0	1912 明45	75	78	41
1874 明7	0	2	0	1913 大2	103	46	43
1875 明8	1	0	0	1914 大3	121	20	61
1876 明9	0	1	0	1915 大4	127	13	77
1877 明10	0	0	0	1916 大5	67	6	26
1878 明11	1	0	0	1917 大6	63	5	25
1879 明12	1	4	1	1918 大7	73	1	36
1880 明13	16	12	3	1919 大8	68	3	37
1881 明14	9	6	9	1920 大9	68	4	43
1882 明15	2	6	1	1921 大10	106	6	54
1883 明16	18	2	1	1922 大11	122	24	54
1884 明17	9	5	3	1923 大12	121	62	34
1885 明18	6	34	4	1924 大13	285	106	84
1886 明19	11	51	8	1925 大14	312	199	93
1887 明20	13	34	7	1926 大15	254	170	70
1888 明21	5	28	2	1927 昭2	330	200	138
1889 明22	11	17	8	1928 昭3	303	208	158
1890 明23	16	16	7	1929 昭4	335	178	185
1891 明24	29	21	27	1930 昭5	375	260	124
1892 明25	37	19	27	1931 昭6	252	138	88
1893 明26	25	18	16	1932 昭7	255	94	97
1894 明27	31	66	25	1933 昭8	211	52	98
1895 明28	13	18	12	1934 昭9	201	34	92
1896 明29	24	20	20	1935 昭10	200	62	98
1897 明30	39	24	34	1936 昭11	198	85	94
1898 明31	33	24	30	1937 昭12	219	52	104
1899 明32	49	33	36	1938 昭13	177	74	92
1900 明33	65	39	49	1939 昭14	219	138	118
1901 明34	73	60	32	1940 昭15	303	75	182
1902 明35	116	36	46	1941 昭16	542	114	301
1903 明36	128	28	62	1942 昭17	569	266	281
1904 明37	54	21	21	1943 昭18	491	483	168
1905 明38	30	26	15	1944 昭19	216	207	125
1906 明39	42	28	17	1945 昭20	27	34	18
1907 明40	38	31	25	合計	8,582	4,545	4,037

児童ノ玩弄（ろう）ニ供スル絵本類ノ如キ極メテ卑近ニシテ有用ニ属セザル分廃棄ノ件ハ聞届ク、但、一種類ニ付一通ハ保存スベシ」として「一年乃至五年間保存の上適宜廃棄差し支えない」との文部省からの指示が残されている。ここでは、最低1冊は保存することが求められているが、東京図書館、帝国図書館時代を通じて、慢性的に極度の書庫不足に苦しめられる中で、実際には「卑近ノモノニシテ永久保存ノ必要無之ト認メタル類ハ便宜廃棄致シ」ていたことが、内務省との往復文書記録から判明している¹⁹⁾。これを丙部の存在を具体的に示す文書記録とするならば、前述の「広告、引札、正月用の玩具、日記類、帳簿類」の範囲を超えて「児童の玩弄に供する絵本類」など今日の「児童書」の一部に該当する資料が廃棄されていた可能性が残る。今後の調査が必要であろう。

次に、図書館で蔵書として受入（甲部か乙部）た後に蔵書を廃棄した記録としては、次の事例が残されている²⁰⁾。

- ① 明治44年1月25日払暁、東京美術学校火災の為め、帝国図書館移転の際同校文庫を借受貯蔵中なりし帝国図書館所蔵乙部図書の一部は半焼又は消防の水を濺り使用不能となり、翌45年7月29日、乙部図書29,587冊を廃棄処分に付す。
- ② 大正5年、帝国図書館蔵書中破損甚だしきもの、諸学校講義録等合計3,348冊を廃棄処分に付す。
- ③ 大正12年9月1日、帝国図書館蔵書中和漢書236部311冊、洋書58部96冊を焼失す。
- ④ 大正12年10月9日、「震災による被害調査」図書の焼失、和書717冊、洋書205冊。図書の破損、洋装約6,000冊、和装約2,500冊。焼失場所、桜井製本所、文部省、東京博物館、内務省等。
- ⑤ 大正12年12月10日、甲部図書中破損のため使用に堪えざるもの687冊の廃棄手続きを完了。

これらのうち、児童書と関連が深いと推測されるものは、明治44年の乙部図書29,587冊の焼失事件である。表1をみると明治45年度の乙部図書24,010冊の減数としてこの時の痕跡が示されている。この「乙部図書焼失」は『上野図書館八十年略史』にも記載されているが²¹⁾、これまであまり論じられてはこなかった。しかし、明治末年で約24万冊を数えていた乙部図書の1割を超える3万冊を失ったことは、乙部には複本が多数含まれていた点を考慮しても、蔵書面への影響は少なくないものと推測される²²⁾。

最後に、児童書と関連のある事項として、「大日本教育会附属図書館」への通俗図書貸付を取り上げる。同館は、日本で最初に児童の利用を認めた図書館として知られるが、明治22年、当時の東京図書館は、蔵書中の通俗書14,760部を10年の期限で貸し付けた。このうち、1,700余冊は返還延期の願出により、最終的に明治40年まで貸付が継続した。興味が持たれる点は、この「通俗書」の内容であるが、明治32年5月25日に期間満了で返却された図書90部347枚の目録が残されており²³⁾、その中には、児

童書ではないものの『小学読本』『小学博物階梯』『尋常小学作文階梯』『小学博物図説』『小学修身編』『初学須知』などの資料が散見される。

注

- 1) 明治6年の新聞紙条例, 同8年の出版条例以降の出版警察法制に依拠した制度であった。
- 2) 昭和3年頃からは「毎週1回日を定めて図書館側から内務省警保局図書課へ出向して1週間分ずつを受領」する形であったとされる。岡田温「旧上野図書館の収集方針とその蔵書」『図書館研究シリーズ』no.5, p.199-212, 1961
- 3) 岡田 同上
- 4) 現在の概念に近い「児童書」が誕生するのは明治20年代以降のことであるが, 当時の資料観では卑近なものの一つとされていた。児童書以外の乙部資料としては, 「①あまり重要と認められない重複本, ②パンフレットの類, ③意見書, 趣意書, 陳情書などのリーフレットの類, ④講演ないし通俗文芸物, ⑤私家版の詩文集, ⑥児童向け啓蒙書, リーダー, 作文書, 習字書, 法帖, 稽古本の類, ⑦絵本, 唱歌集」などが含まれたとされる。森清「国立国会図書館で進行中の明治期刊行図書目録」『日本古書通信』no.308, 1969
- 5) 岡田 前掲論文
- 6) 加藤宗厚『国立図書館の現状』(未定稿)1948では, 「甲部60%, 乙部20%, 丙部20%」との記載が見られるが根拠は不明である。
- 7) 国立国会図書館支部上野図書館編『帝国図書館年報(複製版)』1974による。記載中単純な記入ミスと思われる箇所は修正を加えた。『上野図書館八十年略史』p.168の各年の蔵書総数と明治21, 22年の数字が一致しないが, これは同書では甲部のみの数字を掲記しているためと思われる。この他として, ①明治18年は計数方法の変更と複本の乙部への繰入れにより前年と数字が大きく変動している, ②明治32年の甲部増加数には, 名古屋大惣本(江戸期貸本約9,000冊)の購入分を含む。
- 8) 加藤 前掲論文
- 9) 拙稿「シリーズ国立国会図書館の児童書 第1回国立国会図書館の児童資料の歴史」『図書館協力通信』no.50 p.1-2, 1995
- 10) 昭和24年9月21日に乙部図書中の児童図書2,466冊, 翌25年1月16日に甲部児童図書1,160冊の計3,626冊を中央館へ移動との記載が, 『上野図書館八十年略史』1953 p.149に見られるが, 前者は明治以降の乙部中の児童図書, 後者が昭和15年~20年受入の900函に相当するものと思われる。
- 11) 先の「公開運動」の際に作成された『国立国会図書館における児童書のシマ(和書のみ)1968.10.15現在』と題する資料では「帝国図書館時代のもの(一般書にまじって整理配架されているもの)①明治~昭和15(受入順)約1,000冊以上(閲覧目録あり)」という記載がある。
- 12) 1997年現在, 「明治期刊行図書」の遡及入力完了(109,832件)している。また, 「乙部図書(未整理)」を含む「昭和前期刊行図書」の遡及入力作業が1993年から, 同じく「大正期刊行図書」は1995年から開始されている。
- 13) 牧野正久「年報『大日本帝国内務省統計報告』中の出版統計の解析 上・下」『日本出版史料1』1995, 『日本出版史料2』1996

- 14) 鳥越信編『講座日本児童文学 別巻2 日本児童文学史年表1』明治書院 1975『講座日本児童文学 別巻2』明治書院 1977
- 15) 総計8,612タイトルを刊行年月日順の編年体で収録している。ただし、児童書関連図書の一部を含む。
- 16) 『情報目録』収録点数を計数したところでは、前書きに記載されている8,612タイトルよりも少なかった。国会の数字は、現在構築中の『児童図書目録』遡り入力データベースにより算出したが、比較のため『情報目録』の記載にあわせて叢書や多巻物を各冊単位で計数したため、前節までの数字(約4,000)よりも多くなっている。
- 17) 拙稿「旧帝国図書館の和雑誌収集をめぐる」『参考書誌研究』no.36, p.1-21, 1989
- 18) 大滝則忠, 土屋恵司「帝国図書館文書による戦前期出版警察法制の一側面」『参考書誌研究』no.12, p.14-32, 1976
- 19) 交付本の返却を内務省に求められたところが、図書館側ではすでに廃棄していた事例が発端となり、内務省側に廃棄資料の存在が知られるようになったため、内務省からの交付資料の一部(雑誌を含む)が途絶したとされる。大滝, 土屋 上掲論文
- 20) 財津次雄編『上野図書館沿革史料年表(稿)』
- 21) 『上野図書館八十年略史』1953 p.151
- 22) 明治31~39年の間、帝国図書館の新築工事がおこなわれていたが、美術学校への乙部資料の疎開は、その期間に行われたものであろう。また、明治45年7月の館内伺では、「廃棄資料は、明治22年以前収蔵のものが多数を占める」との記載がある。
- 23) 明治32年諸向往復文書綴中、「帝国図書館依託書中明治32年分現在目録」による。

2 蔵書面からのアプローチ

本章では視点を変え、各論的に資料の所蔵状況を検討することで、旧帝国図書館時代の児童書コレクションの特徴を跡付ける。

2-1 明治初期の翻訳物

日本の近代児童文学の黎明は、明治初期の西欧文明の流入、翻訳・翻案書の出版からはじまる。多くは成人向けに刊行されたもので、必ずしも児童を意識したものではなかったが、児童書の前史として欠かすことのできない資料群である。とりわけ、明治10年代のジュール・ベルヌの空想科学小説の人気とその翻訳者、井上勤の活躍が特筆される¹⁾。

表3に明治初年の代表的翻訳書の所蔵状況を示す²⁾。これらは国会では「児童書」に括られてはいないが、所蔵状況は大変よい³⁾。また、その半数は乙部扱いの資料である。

表3 明治初期の大衆翻訳文学の所蔵状況

刊年	月	書名	原作者	訳者・翻案者	発行元	大阪	甲部	乙部
1870		西国立志編 1~10	スマイルス	中村正直	須原屋茂兵衛	◎	○	
1875		開巻驚奇 暴夜物語	アラビヤナイト	永峯秀樹	奎章閣	○		○
1880	6	新説 八十日間世界一周	ベルヌ	川島忠之助	川島忠之助	○	○	
1880	8	鵝璃番兒回島記	スウィフト	片山平三郎	玉山堂	○	○	
1880	12	九十七時二十分間月世界旅行 1~10	ベルヌ	井上勤	二書楼	○	○	
1880	12	二万里海底旅行	ベルヌ	鈴木梅太郎	山本	○		
1882	6	千万無景 星世界旅行	ベルヌ	貴名俊一	貴名俊一	○		
1883	7	月世界一周	ベルヌ	井上勤	博聞社	○	○	
1883	7	全世界一大奇書 1~10	アラビヤナイト	井上勤	報告堂	○	○	
1883		亜非利加内地 三十五日間空中旅行 1~6	ベルヌ	井上勤	絵入自由出版社	○		○
1883	6	露国奇聞 花心喋思録	プーシキン	高須治助	法木書屋			○
1883	10	絶世奇談 魯敏孫漂流記	デュフォー	井上勤	長尾景弼	○		○
1883	10	西洋珍説 人肉質入裁判	シュークスピア	井上勤	今古堂		○	
1884	2	六万英里 海底紀行	ベルヌ	井上勤	博聞社	○	○	
1884	7	独乙奇書 狐の裁判	ゲーテ	井上勤	絵入自由出版社		○	
1884	8	五大洲中 海底旅行	ベルヌ	大平三次	四通社	○		○
1884	8	英国太上大臣 難船日記	ベルヌ	井上勤	絵入自由出版社	○		○
1884	10	白露革命外伝 自由の征矢	ベルヌ	井上勤	絵入自由出版社	○		○
1885	1	拍案驚奇 地底旅行	ベルヌ	三木愛華	丸春堂	○	○	
1886	8	九十七時二十分間月世界旅行	ベルヌ	井上勤	三木佐助	◎		○
1886	11	全世界一大奇書	アラビヤナイト	井上勤	広知社	◎		○
1886		理科仙郷	バックレー	山県悌三郎	普及舎	○	○	
1887		万里絶城 北極旅行	ベルヌ	福田直彦	春陽堂	○	○	
1887	2	砂漠旅行 亜拉比亜奇譚	ハウフ	霞城山人	浜本伊三郎	○		○
1887	2	学術妙用 造物者驚愕試験	ベルヌ	井上勤	広知社	○	○	
1887	3	新訳 魯敏孫漂流記	デュフォー	牛山鶴堂	春陽堂	◎	○	
1887	9	西洋昔噺 八つ山羊	グリム	呉文聡	弘文社			○
1887	12	妖怪船	ハウフ	高橋礼五郎	松成堂	○		
1888	4	泰西奇談 旅路の空	ハウフ	田口栢城	イーグル書房	○	○	
1988	11	通俗八十日間世界一周	ベルヌ	井上勤	自由閣			○
1888	12	諷世奇談 王様の新衣裳	アンデルセン	河野政喜	祥雲堂			○
1889	10	家庭叢話 おほかみ	グリム	上田万年	吉川半七	◎		○
						5	15	15

※「大阪」の○は『情報目録』収録◎はそのうち所蔵のあるものを示す。また、「国会」の所蔵は甲部と乙部に分けて記した。

2-2 「博文館」叢書

日本最初の創作児童文学とされる、巖谷小波『こがね丸』は、明治24年博文館叢書『少年文学』（明24～27年，32編）の第1編として刊行された。明治20年大橋佐平の創

表4 博文館刊行の「三大叢書」の所蔵状況

日本昔噺（明治27～29年）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
国会	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○	○	○	○	○	○
大阪	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
三康	○	○	○	○	○	○			○	○		○		○	○		○	○					○	○

日本お伽噺（明治29～32年）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
国会	○	○	○	○	○					○			○	○	○			○	○	○	○	○	○	○
大阪	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○	○	○	○	○	○	○
三康	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○	○					○

世界お伽噺（明治31～40年）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25
国会	○	○	○	○	○	○	○												○		○	○	○	○	○
大阪	○	○	○	○		○	○	○	○	○		○	○	○		○	○	○	○	○	○	○		○	○
三康	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				○	○		○	○	○	○	○	○		○	○
	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50
国会	○		○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○
大阪		○	○		○		○	○	○	○	○	○	○	○	○				○	○	○	○	○	○	○
三康		○	○			○	○	○	○		○				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75
国会	○	○	○		○				○	○		○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
大阪	○		○	○	○	○	○	○							○		○								
三康		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
国会	○	○	○	○	○	○					○	○			○				○	○	○				
大阪							○	○						○					○				○		
三康	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

業による博文館は明治後期に「出版王国」を築いたことで知られ、同22年の雑誌『日本之少年』の創刊、小波主筆による「叢書」の成功で、明治期の児童書出版市場をも席捲した。

表4（前頁）に小波の「三大叢書」といわれる『日本昔噺』（明27～29年、24編）、『日本お伽噺』（明29～32年、24編）、『世界お伽噺』（明32～41年、100編）の所蔵状況を掲げる⁴⁾。国会の所蔵では、かたまって所蔵がない部分があるが、先の乙部図書の焼失と関係があるのだろうか。

2-3 金港堂書籍

「博文館」全盛の明治後期児童出版界に波乱を巻き起こしたものが、教科書出版で知られる「金港堂」の進出である。「明治35年年頭に至り、金港堂は突如として新企画を樹て、各種の大衆向け雑誌と、卑近なる一般図書の大量生産に向つて、その力を傾くことになった⁵⁾」と記される金港堂旋風の痕跡は『情報目録』でも明治35年からの収録件数の急増に現れている。『少年界』『少女界』など「十大雑誌」の創刊と「お伽噺叢書」の刊行は、「平易な表現で安価（一冊三銭から六銭の小型本）」⁶⁾なため、商業的にも一応の成功をおさめたが、同じ明治35年末に有名な「教科書疑獄」の摘発を受けて、次第に衰退の道をたどる。

表5はこの金港堂旋風の影響を見るため、明治35～37年の「博文館」と「金港堂」発行児童書の所蔵状況を国会、大阪で比較したものである。「金港堂」の国会での所蔵が極端に低いが、このことは「低俗」とされた「金港堂」叢書が選択的に排除されていたことを推測させ、興味深い。

表5 「博文館」と「金港堂」刊行資料の所蔵比較（1902～1904）

	博文館						金港堂					
	『情報目録』 件数	「国会」		「大阪」		『情報目録』 件数	「国会」		「大阪」			
		所蔵	%	所蔵	%		所蔵	%	所蔵	%		
1902 明35	28	21	75.0	14	50.0	60	1	1.7	15	25.0		
1903 明36	45	18	40.0	18	40.0	46	0	0.0	14	30.4		
1904 明37	32	18	56.3	14	43.8	10	0	0.0	1	10.0		
合計	105	57	54.3	46	43.8	116	1	0.9	30	25.9		

2-4 小川未明著作にみる受入の揺らぎ

表2にみるように大正年間に入ると国会所蔵の児童書数が急落する。残念ながら、現在は大正期刊行図書の遡及入力作業が完了していないため所蔵資料を一覧することが難しく、その理由が「受入数の減少」か「甲部扱いの増加」なのか単純に結論づけられない。遡及入力中の「大正期乙部図書」には「立川文庫」などが含まれるが⁷⁾、その全貌は不明である。

このような大正期の状況、特に、甲部扱いの児童書がどの程度あるのかを知る手がかりとして、大正期を代表する児童文学者、小川未明の戦前期著作の所蔵状況を調べた。(表6…論考末にあり)

未明は、大正15年(1926)の「童話宣言」以降は、児童文学の創作に専心するが、大正年間までは多数の小説も発表した。『小作人の死』などの小説が甲部扱いとされたことは当然ながら、大正年間では、『赤い蠟燭と人魚』『鉛チョコ天使』などの童話作品も甲部とされたことが注目される。さらに、昭和に入ると現在所蔵のある著作すべてが甲部扱いとなっている⁹⁾。

大正期を収録範囲とする『帝国図書館和漢図書書名目録 第4編』には、「児童図書館叢書」(イデア書院)、「世界少年文学名作集」(精華書院)など、この時期の代表的叢書が収録されており、大正年間に児童書の一部を甲部扱いとする方針変更があったことが窺われる。

2-5 昭和戦前期

戦前期を含む昭和23年までの刊行資料は、「昭和前期選及入力作業」として進められている⁹⁾。大正期と昭和前期の乙部図書からは児童書を抜き出したとされていたが、「昭和期乙部図書」(69,480件)中にはなお児童書が散見され、旧900函以外で甲部扱いとされた児童書(600~700函に含まれるもの)とともに今後『児童図書目録』に収録されていない児童書の全貌を明らかにしていく必要がある。ここでは、その一端として、昭和11年に創業した偕成社の刊行図書記録をもとに国会と大阪の所蔵状況を調べた¹⁰⁾。(表7)昭和10年代では、900函を含めて甲部となっている資料が多いことが特徴的である。また、『情報目録』未収録の資料が相当あることも判明した。

表7 偕成社刊行児童図書(1936~1944)にみる所蔵状況の比較

	刊行数	『情報目録』収録	「大阪」所蔵数	「国会」所蔵数	(内 訳)			
					一般甲	一般乙	児童甲	児童乙
昭和11年(1936)	1	1	0	0	0	0	0	0
昭和12年(1937)	4	2	0	1	0	0	0	1
昭和13年(1938)	6	4	1	2	0	0	0	2
昭和14年(1939)	2	1	1	2	1	1	0	0
昭和15年(1940)	16	6	4	3	3	0	0	0
昭和16年(1941)	30	13	4	15	8	2	1	4
昭和17年(1942)	24	10	3	20	12	0	8	0
昭和18年(1943)	21	9	1	12	4	0	8	0
昭和19年(1944)	10	4	0	9	4	0	5	0
合計	114	50	14	64	32	3	22	7

2-6 児童雑誌¹¹⁾

これまで、図書資料を中心に旧帝国図書館児童書の所蔵状況を瞥見したが、時期により差はあるものの、比較的良好に所蔵されている図書に比べて、児童雑誌の場合は悲惨な程に所蔵がない。その理由は、雑誌の場合、旧内務省からの資料交付（内交）が明治中期に途絶し、旧帝国図書館では主に寄贈、購入により必要な資料を収集していたため¹²⁾、旧帝国図書館で積極的収集対象とみなされていなかった児童雑誌は結果として収集されなかったものと推測される。

表 8（論考末にあり）に戦前期の代表的児童雑誌の所蔵状況を経時的に示したが、明治30年代までの所蔵状況は比較的良好であるが、明治40年代から大正年間以降は、『少女の友』『日本少年』などのわずかな例外を残して、所蔵が見られなくなる。

注

- 1) 滑川道夫「児童文学の視点（明治・大正期）」『日本児童文学の軌跡』理論社 1988
- 2) 対象資料は、上掲書を参照しながら、『情報目録』等から選定した。明治期のアンデルセン、グリムの翻訳では、石川前掲書に詳しい。
- 3) 『情報目録』の収録対象自体が、旧帝国図書館蔵書を参考しているために所蔵割合が高いとも考えられる。
- 4) 三康図書館の所蔵は、財団法人三康文化研究所編『三康図書館蔵書目録 児童書編』1970によった。「三康図書館」は、明治35年に博文館社主、大橋佐平、新太郎父子により創設された「私立大橋図書館」の蔵書を引き継ぐもので、博文館とは縁が深い。しかし、1921年の関東大震災で一度全焼しており、『博文館発行図書目録 大橋図書館所蔵（昭和14年5月末日現在）』を見てもすべての博文館発行書籍が揃っているわけではない。
- 5) 木村小舟『明治少年文学史 第1巻』p.181（童話春秋社 1949の復刻）大空社 1995
- 6) 滑川 前掲書 p.181
- 7) 図書部書誌課「和図書遡及入力計画最終段階へー大正期分の入力作業に着手」『国立国会図書館月報』no.414, p.2-9, 1995
- 8) 旧900函の児童書も甲部扱いとみなした。
- 9) 瀬川弘悦、菅原篤子「昭和期前期和図書の遡及入力開始にあたって」『国立国会図書館月報』no.391, p.2-9, 1993
- 10) 『偕成社五十年の歩み』1987 収録の「偕成社図書年表（図書リスト）」から児童書をリストアップした。
- 11) 拙稿「シリーズ国立国会図書館の児童書 第5回児童雑誌」『図書館協力通信』no.55, p.2-3, 1996
- 12) 拙稿「旧帝国図書館の和雑誌収集をめぐる」『参考書誌研究』no.36, p.1-21, 1989
なお、追記として旧帝国図書館から旧内務省に対して途絶していた雑誌交付を願い出していた（昭和3年7月14日付、帝図普第4号）ことが新たに判明した。

むすびに代えて——今後の課題

本稿は、旧帝国図書館時代の児童書コレクションについて、その特色や問題点の全容を明らかにする目的で、できる限り概括的・包括的素描を試みたものである。しかしながら、基礎的調査不足のため、断片的で十分なものとどまってしまった。

とはいえ、これまでの部分的検討の範囲でも、旧帝国図書館の児童書コレクションが、出版文化の記録を後世に伝える納本コレクションとして十分なものではなく、また、一般書に混入した児童書の全容がつかめないなど多くの課題を残していることを提示できたのではないと思う。その意味で、児童書資源の基盤整備を進めるために基礎的調査を続けていく必要があるが、ここでは今後の検討課題を挙げて、他日を期したいと願う。

今後の調査の基本は、現存する資料についての情報を集積していくことであろう。現在進行中の大正期や昭和前期の和図書遡及入力を終了で、旧帝国図書館以来の国立国会図書館の蔵書全体の書誌データベースが完成する。本稿で試みた著者や出版者からの手がかりによって調査を重ねることや他機関の所蔵資料と比較することで、国立国会図書館が所蔵する児童書資料の全体を明らかにすることが必要である。

同時に、戦前までの児童書を多く所蔵する機関の協力によって「総合目録データベース」を構築することが重要な課題である。とりわけ、児童雑誌のように欠落の多い資料群については、国内に現存する資源を一元的に把握する機能が強く望まれる。現在、支部上野図書館に開設が予定される「国際子ども図書館」の構想では、大阪国際児童文学館、都立日比谷図書館児童資料室、神奈川県立近代文学館等の類縁機関の書誌データを統合する総合目録システムが計画されており、その実現に期待したい。

また、今回十分な検討ができなかった領域に、絵本、漫画といった児童書の周辺ジャンルの状況、児童文学作品以外の科学読み物や知識の本などの状況の調査がある。これらは、文学作品に比べて基礎的資料も少なく、現存する資料の割合など今後の調査に待つ部分が多い。

国立国会図書館の児童書について最も早い時期から収集と保存の問題を提起した先達である石川春江氏は、「木を見ずに森を見よ」との名言を残している¹⁾。過去の児童書を後世に残すことは、決して一部の好事家のためだけになされるものではない。「児童書」ほど社会が次世代に対して何を主張し何を伝えたいかを如実に示す資料はない。その意味で「児童書」に込められた社会や時代の思いを全体として記録し伝えていく営為は、すぐれて文化の本質に根差した意義を持つのであり、児童書は、広く社会や人間、芸術・文化を考究するための基本資料と位置づけられるべきものである。

注

- 1) 石川春江「図書館資料としての児童書」『図書館雑誌』vol.63, no.6, p.273-276, 1969

表1 旧帝国図書館における資料受入数・蔵書数の推移

(単位:冊)

	甲部	乙部	総計	和漢書計	甲部和漢書	乙部和漢書	①甲部増加分	②乙部増加分	①/②	洋書計	甲部洋書	乙部洋書
1875 明8	—	—	33,037	26,517	—	—	—	—	—	6,520	—	—
1876 明9	—	—	74,580	60,386	—	—	—	—	—	14,194	—	—
1877 明10	—	—	77,562	63,840	—	—	—	—	—	13,722	—	—
1878 明11	—	—	101,262	86,585	—	—	—	—	—	14,677	—	—
1879 明12	—	—	111,869	96,920	—	—	—	—	—	14,949	—	—
1880 明13	—	—	107,980	94,245	—	—	—	—	—	13,735	—	—
1881 明14	—	—	24,298	19,810	—	—	—	—	—	4,488	—	—
1882 明15	—	—	24,627	20,123	—	—	—	—	—	4,504	—	—
1883 明16	100,335	36,267	136,602	—	—	27,697	—	—	—	—	—	8,570
1884 明17	108,059	42,108	150,167	132,804	99,876	32,928	—	5,231	—	17,093	8,183	8,910
1885 明18	87,778	74,790	162,568	145,002	79,396	65,606	△20,480	32,678	—	17,566	8,382	9,184
1886 明19	109,813	100,857	210,670	180,675	90,013	90,662	10,617	25,056	0.42	29,995	19,800	10,195
1887 明20	117,836	116,586	234,422	—	—	92,107	—	—	—	—	—	10,725
1888 明21	121,272	134,330	255,602	—	—	122,528	—	30,421	—	—	—	11,802
1889 明22	125,791	151,821	277,612	236,452	101,471	134,981	—	12,453	—	41,160	24,320	16,840
1890 明23	128,818	156,902	285,720	243,511	103,259	140,252	1,788	5,271	0.34	42,209	25,559	16,650
1891 明24	132,396	161,465	293,861	250,791	106,054	144,737	2,795	4,485	0.62	43,070	26,342	16,728
1892 明25	137,401	168,036	305,437	260,348	109,281	151,067	3,227	6,330	0.51	45,089	28,120	16,969
1893 明26	142,172	175,137	317,309	270,804	112,736	158,068	3,455	7,001	0.49	46,505	29,436	17,069
1894 明27	146,718	182,827	329,545	282,034	116,578	165,456	3,842	7,388	0.52	47,511	30,140	17,371
1895 明28	151,787	186,202	337,989	289,347	120,654	168,693	4,076	3,237	1.26	48,642	31,133	17,509
1896 明29	155,728	188,749	344,477	294,866	123,750	171,116	3,096	2,423	1.28	49,611	31,978	17,633
1897 明30	164,219	187,376	351,595	304,825	131,388	173,437	7,638	2,321	3.29	46,770	32,831	13,939
1898 明31	173,579	190,907	364,486	316,345	139,481	176,864	8,093	3,427	2.36	48,141	34,098	14,043
1899 明32	188,205	194,625	382,830	332,832	152,391	180,441	12,910	3,577	3.61	49,998	35,814	14,184
1900 明33	199,423	201,996	401,419	349,211	161,367	187,844	8,976	7,403	1.21	52,208	38,056	14,152
1901 明34	211,662	206,930	418,592	363,661	171,084	192,577	9,717	4,733	2.05	54,931	40,578	14,353
1902 明35	217,092	212,426	429,518	371,755	173,807	197,948	2,723	5,371	0.51	57,763	43,285	14,478
1903 明36	222,875	214,999	437,874	378,017	177,599	200,418	3,792	2,470	1.54	59,857	45,276	14,581
1904 明37	232,290	218,065	450,355	389,206	185,905	203,301	8,306	2,883	2.88	61,149	46,385	14,764
1905 明38	241,334	221,628	462,962	399,642	192,970	206,672	7,065	3,371	2.10	63,320	48,364	14,956
1906 明39	252,436	225,088	477,524	412,145	202,453	209,692	9,483	3,020	3.14	65,379	49,983	15,396
1907 明40	260,770	225,500	486,270	418,127	208,194	209,933	5,741	241	23.82	68,143	52,576	15,567
1908 明41	270,619	229,991	500,610	429,688	215,455	214,233	7,261	4,300	1.69	70,922	55,164	15,758
1909 明42	278,945	234,306	513,251	439,288	221,030	218,258	5,575	4,025	1.39	73,963	57,915	16,048
1910 明43	287,294	239,466	526,760	449,802	226,468	223,334	5,438	5,076	1.07	76,958	60,826	16,132
1911 明44	295,644	243,439	539,083	459,041	231,893	227,148	5,425	3,814	1.42	80,042	63,751	16,291
1912 明45	301,247	219,569	520,816	437,646	234,508	203,138	2,615	△24,010	—	83,171	66,740	16,431
1913 大2	306,713	224,224	530,937	445,460	237,844	207,616	3,336	4,478	0.74	85,473	68,865	16,608
1914 大3	316,357	226,584	542,941	454,554	244,755	209,799	6,911	2,183	3.17	88,387	71,602	16,785
1915 大4	325,213	228,744	553,957	462,427	250,631	211,796	5,876	1,997	2.94	91,530	74,582	16,948
1916 大5	329,755	230,493	560,248	466,994	253,606	213,388	2,975	1,592	1.87	93,254	76,149	17,105
1917 大6	337,152	232,323	569,475	474,213	259,183	215,030	5,577	1,642	3.40	95,262	77,969	17,293
1918 大7	343,755	233,792	577,547	480,426	264,073	216,353	4,890	1,323	3.70	97,121	79,682	17,439
1919 大8	349,868	235,237	585,105	486,208	268,535	217,673	4,462	1,320	3.38	98,897	81,333	17,564
1920 大9	356,102	236,762	592,864	492,559	273,494	219,065	4,959	1,392	3.56	100,305	82,608	17,697
1921 大10	362,150	238,612	600,762	499,069	278,395	220,674	4,901	1,609	3.05	101,693	83,755	17,938
1922 大11	370,126	241,410	611,536	508,385	285,139	223,246	6,744	2,572	2.62	103,151	84,987	18,164
1923 大12	378,235	243,410	621,645	516,640	291,496	225,144	6,357	1,898	3.35	105,005	86,739	18,266
1924 大13	386,999	246,230	633,229	526,397	298,684	227,713	7,188	2,569	2.80	106,832	88,315	18,517
1925 大14	395,256	250,730	645,986	537,112	305,467	231,645	6,783	3,932	1.73	108,874	89,789	19,085
1926 大15	405,685	255,933	661,618	550,865	314,586	236,279	9,119	4,634	1.97	110,753	91,099	19,654
1927 昭2	414,956	260,929	675,885	563,252	322,379	240,873	7,793	4,594	1.70	112,633	92,577	20,056
1928 昭3	424,377	265,132	689,509	575,611	330,851	244,760	8,472	3,887	2.18	113,898	93,526	20,372
1929 昭4	436,506	270,437	706,943	590,994	341,480	249,514	10,629	4,754	2.24	115,949	95,026	20,923
1930 昭5	447,665	274,751	722,416	604,684	351,259	253,425	9,779	3,911	2.50	117,732	96,406	21,326
1931 昭6	458,398	278,996	737,394	617,661	360,530	257,131	9,271	3,706	2.50	119,733	97,868	21,865
1932 昭7	469,252	284,153	753,405	632,252	370,482	261,770	9,952	4,639	2.15	121,153	98,770	22,383
1933 昭8	484,302	290,430	774,732	651,551	384,176	267,375	13,694	5,605	2.44	123,181	100,126	23,055
1934 昭9	499,725	297,503	797,228	671,958	398,065	273,893	13,889	6,518	2.13	125,270	101,660	23,610
1935 昭10	515,696	305,694	821,390	694,125	412,668	281,457	14,603	7,564	1.93	127,265	103,028	24,237
1936 昭11	532,511	315,165	847,676	717,935	427,482	290,453	14,814	8,996	1.65	129,741	105,029	24,712
1937 昭12	548,308	324,760	873,068	741,288	441,829	299,459	14,347	9,006	1.59	131,780	106,479	25,301
1938 昭13	561,711	332,221	893,932	760,561	454,056	306,505	12,227	7,046	1.74	133,371	107,655	25,716
1939 昭14	574,771	339,283	914,054	778,592	465,494	313,098	11,438	6,593	1.73	135,462	109,277	26,185
1940 昭15	592,361	345,980	938,341	800,288	480,928	319,360	15,434	6,262	2.46	138,053	111,433	26,620
1941 昭16	609,650	351,616	961,266	821,211	496,553	324,658	15,625	5,298	2.95	140,055	113,097	26,958
1942 昭17	—	—	986,719	843,689	—	—	—	—	—	143,030	—	—
1943 昭18	663,596	359,426	1,023,022	878,123	545,992	332,131	—	—	—	144,899	117,604	27,295
1944 昭19	680,499	360,949	1,041,448	895,545	561,931	333,614	15,939	1,483	10.75	145,903	118,568	27,335
1945 昭20	685,054	361,017	1,046,071	899,051	565,369	333,682	3,438	68	50.56	147,020	119,685	27,335
1946 昭21	690,333	361,399	1,051,732	904,689	570,625	334,064	5,256	382	13.76	147,043	119,708	27,335
1947 昭22	699,121	361,532	1,060,653	912,031	577,834	334,197	7,209	133	54.20	148,622	121,287	27,335

※「—」は統計の記載がなく、算出できなかった部分である。また、明治14、15年は、「部」数で記載のため、単純な比較ができない。

表6 「小川未明」戦前著作にみる受入・所蔵の状況

	刊行年	書名	発行所	種別	甲部	乙部	『児童図書 目録』収録	大阪
1	1907	愁人	隆文館	小説	○			—
2	1907	緑髪	隆文館	小説	○			◎
3	1909	惑星	春陽堂	小説	○			◎
4	1910	闇	新潮社	小説				◎
5	1910	赤い船	京文堂	童話		○	○	◎
6	1912	物言はぬ顔	春陽堂	小説		○		◎
7	1912	少年の笛	新潮社	小説				◎
8	1912	魯鈍な猫	春陽堂	小説		○		◎
9	1912	北国の鴉より	岡村盛花堂	感想・小品		○		◎
10	1913	白痴	文影堂書店	小説		○		◎
11	1913	廃墟	新潮社	小説				◎
12	1914	あの山越えて	尚栄堂	詩集		○		◎
13	1914	夜の街にて	岡村盛花堂	感想・小品		○		—
14	1914	美しき空へ	博文館	童話				—
15	1914	底の社会へ	岡村書店	小説		○		◎
16	1914	石炭の火	千章館	小説	○			—
17	1915	紫のダリヤ	鈴木三重吉発行	小説				◎
18	1915	雪の線路を歩いて	岡村書店	小説				◎
19	1917	物言はぬ顔	新潮社	小説		○		◎
20	1918	小作人の死	春陽堂	小説	○			◎
21	1918	青白む都会	春陽堂	小説	○			◎
22	1918	描写の心得	春陽堂	感想集				—
23	1918	血で描いた画	新潮社	小説	○			◎
24	1918	星の世界より	岡村書店	童話				◎
25	1919	悩ましき外景	天祐社	小説				—
26	1919	金の輪	南北社	童話				◎
27	1920	不幸な恋人	春陽堂	小説				—
28	1921	赤き地平線	新潮社	小説	○			◎
29	1921	赤い蠟燭と人魚	天祐社	童話	○			◎
30	1921	雨を呼ぶ樹	南郊社	小説	○			◎
31	1921	港に着いた黒んぼ	精華書院	童話				◎
32	1922	血に染む夕陽	一步社	小説				—
33	1922	生活の火	精華書院	感想集	○			◎
34	1922	小さな草と太陽	赤い鳥社	童話	○			◎
35	1923	彼等の行く方へ	絵文館	小説	○			◎
36	1923	人間性のために	二松堂	感想集	○			◎
37	1923	気まくれ人形師	七星社	童話		○	○	◎
38	1923	紅雀	集成社	童話	○			◎
39	1924	鈴チョコの天使	イデア書院	童話	○			◎
40	1924	芸術の暗示と恐怖	春秋社	感想集				◎
41	1924	あかいさかな	研究社	童話		○	○	◎
42	1924	ある夜の星たち	イデア書院	童話		○	○	◎
43	1925	小川未明選集1～6	未明選集刊行会	小説・童話	○			◎
44	1926	感想小品集	創生堂	感想・小品	○			◎
45	1926	兄弟の山鳩	アテナ書院	童話	○			◎
46	1926	鴉の唄うたひ	アテナ書院	童話				—
47	1926	海から来た使ひ	創生堂	童話				◎
48	1926	堤防を突破する浪	創生堂	小説	○			◎
49	1926	蜻蛉のお爺さん	創生堂	童話				◎
50	1927	未明童話集1	丸善	童話	○			◎
51	1927	日本童話集 中	アルス	童話		○	○	◎
52	1927	未明童話集2	丸善	童話	○			◎
53	1927	彼等甦らば	解放社	小説	○			◎
54	1928	未明童話集3	丸善	童話	○			◎
55	1930	未明童話集4	丸善	童話	○			◎
56	1930	明治大正文学全集第30巻	春陽堂	小説	○			◎
57	1930	現代日本文学全集第23編	改造社	小説	○			—
58	1930	常に自然は語る	日本童話協会出版部	感想集	○			◎
59	1930	小川未明創作集	解放社	小説				—
60	1931	未明童話集5	丸善	童話	○			◎
61	1932	青空の下の原っぱ	六文館	童話	○			◎
62	1932	童話雑感及小品	文化書房	感想・小品	○			◎
63	1933	雪原の少年	四条書房	童話				◎
64	1934	童話と随筆	日本童話協会出版部	童話	○			◎
65	1935	コドモエバナシ	東京社	童話				◎
66	1935	女をめぐる疾風	不二屋書房	小説	○			◎
67	1935	小豚の旅	四条書房	童話				—
68	1936	犬と犬と人の話	湯川弘文社	童話				◎
69	1936	未明カタカナ童話読本	文教書院	童話				◎
70	1936	未明ひらかな童話読本	文教書院	童話				◎
71	1936	日本童話	厚生閣	童話				—
72	1936	ドラネコと鳥	岡村書店	童話				◎
73	1937	小学文学童話	竹村書房	童話	○			◎
74	1937	童話と随筆	青年教育普及会	童話				—
75	1938	お話しの木	竹村書房	童話				◎
76	1938	赤い蠟燭と人魚	富山房	童話	○			◎
77	1938	日本の子供	文昭社	童話				◎
78	1938	新撰童話 小川未明集	弘文堂	童話				—
79	1939	竹トンボ	童話春秋社	童話	○		○	◎
80	1939	カタカナ童話集	金の星社	童話	○		○	◎
81	1940	雪原の少年	童話春秋社	童話	○			◎
82	1940	夜の進軍喇叭	アルス	童話				◎
83	1940	新日本童話	竹村書房	童話	○			◎
84	1940	赤土に来る子供達	文昭社	童話	○		○	◎
85	1940	蘭の花	三友社	童話	○			◎
86	1940	鳩とりんご	新潮社	童話	○		○	◎
87	1941	大きな蟹	明治書房	童話				◎
88	1941	雪来る前の高原の話	中央公論社	童話	○			◎
89	1941	小川未明童話六年生	文昭社	童話	○		○	◎
90	1941	亀の子と人形	フタバ書院成光社	童話	○		○	◎
91	1941	キツネノオバサン	有光社	童話				—
92	1941	生きぬく力	正芽社	童話				◎
93	1941	モリノカラス	小学館	童話				◎
94	1942	蜂とこども	有光社	童話				◎
95	1942	新しき児童文学の道	フタバ書院成光社	感想集	○			◎
96	1942	赤いガラスの宮殿	新潮社	童話				◎
97	1942	りっぱな心	帝国教育会	童話				—
98	1942	僕らはこれからだ	フタバ書院成光社	童話				◎
99	1943	モウヂキ春ガキマス	アルス	童話	○		○	◎
100	1943	こどもと犬とさかな	新生閣	童話				—
101	1943	月夜と眼鏡	フタバ書院成光社	童話	○		○	◎
102	1943	ツルギサンノハナシ	日本絵雑誌社	童話	○		○	◎
103	1943	時計のない村	フタバ書院成光社	童話				◎
104	1944	かねも戦地へ	中央出版株式会社	童話				—
合 計					50	13	14	69

※岡上鈴江「父 小川未明」新評論社 1970 所収「小川未明著作目録」を参照した。
「大阪」○は『情報目録』収録作品、そのうち、◎は所蔵のあるものを示す。

表 8 戦前期の代表的児童雑誌の所蔵状況

明	大 昭				誌 名	発 行 所	刊 行 年	所 蔵 年	請 求 記 号
	20	40	10	10					
○					女学雑誌	女子雑誌社	1885~1904	1886.8~1904.2	雑51-4
○					少年園	少年園	1888~1895	1889.5~1895.4	雑52-49
○					小国民(少国民)	学齡館	1889~	1890.12~1903.1	雑52-1
○					日本之少年	博文館	1889~94	1892.10~1894.12	雑52-46
○					少年文武	張弛館	1890~	1890.6~1891.3	雑61-538
○					幼年雑誌	博文館	1891~94	1981.1~1894.12	雑52-48
	○	○	○	○	少年世界	博文館	1895~1933	1895.1~1914.1	雑52-10
	○				新少年	新少年社	1896~	1896.1~1897.1	雑52-43
	○				今世少年	春陽堂	1900~	1900.6~1901.4	雑52-9
	○				幼年世界	博文館	1900~	1900.1~1900.12	雑61-641
	○				少女界	金港堂	1902~04	1905.10	雑61-552
	○	○			少年界	金港堂	1902~14	1902~1911.9	雑52-42
	○	○	○		少年	時事新報社	1903~		
		○	○		幼年号	大日本護国幼年会	1905~		
		○	○	○	少女世界	博文館	1906~31		
		○	○	○	日本少年	実業之日本社	1906~38	1906.9~1937.9	雑52-53
		○	○		実業少年	博文館	1908~12	1908.1~1911.6	雑52-19
		○	○	○	少女の友	実業之日本社	1908~55	1908.3~1915.9	雑52-40
		○	○	○	幼年の友	実業之日本社	1909~		
		○	○		少女(お伽世界)	女子文壇社	1909~12		
		○	○		小学生	同文館	1911~18		
		○	○	○	少女画報	東京社	1912~42	1912.4~1916.7	Z32-551
		○	○		少女	時事新報社	1913~23		
		○	○	○	子供之友	婦人之友社	1914~43		
		○	○	○	少年倶楽部	講談社	1914~62	1942.6~1945.11	Z32-387
		○	○		少女号	小学新報社	1916~		
		○	○		少年号	小学新報社	1916~		
		○	○		良友	コドモ社	1916~27		
		○	○	○	中学生	研究社	1916~45		
		○	○		海国少年	海国少年社	1917~22		
		○	○	○	赤い鳥	赤い鳥社	1918~29, 1931~36		
		○	○		おとぎの世界	文光堂	1919~22		
		○	○		小学男生	実業之日本社	1919~23		
		○	○		小学女生	実業之日本社	1919~23		
		○	○		金の船(金の星)	キンノツノ社	1919~28		
		○	○		小学少年	研究社	1919~28		
		○	○		小学少女	研究社	1919~28		
		○	○		女学生	研究社	1920~		
		○	○		童話	コドモ社	1920~26		
		○	○	○	少年少女譚海	博文館	1920~44		
		○	○	○	コドモノクニ	東京社	1922~44		
		○	○	○	コドモアサヒ	大阪朝日新聞社	1923~		
		○	○	○	少女倶楽部	講談社	1923~62	1940.9~1946.2	Z32-411
		○	○	○	幼年倶楽部	講談社	1926~	1943.5~1946.2	Z32-505
		○	○	○	キングブック	フレーベル館	1927~		
		○	○		少年戦旗	戦旗社	1929~31	1929.6~1929.9	Z32-B83